

先月までの為替相場のレビューと、
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2017/09/04

夏休みシーズン明けでイベント多数

通貨ペア	基調		ページ数
ユーロ/円	➡	ECBと北朝鮮を注視 予想レンジ: 127.400~133.000円	2-3
ユーロ/ドル	➡	ECBの決断なるか 予想レンジ: 1.15000~1.21500ドル	4-5
ポンド/円	➡	離脱交渉進まず 予想レンジ: 137.500~146.000円	6-7
ポンド/ドル	➡	政治も睨んで不安定化 予想レンジ: 1.26500~1.32000ドル	8-9

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

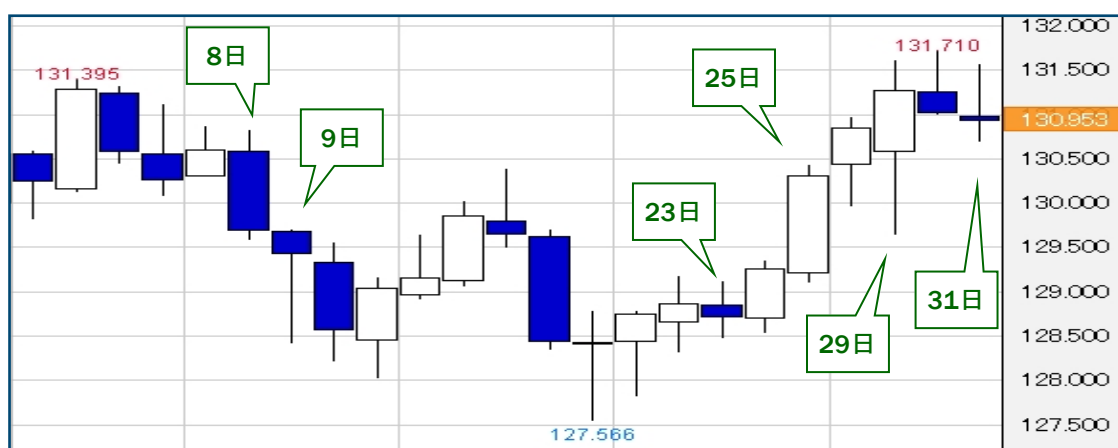
Copyright©2017 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

ユーロ/円 8月の推移

EUR/JPY

8月のユーロ/円相場は127.566～131.710円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.3%の小幅上昇(ユーロ高・円安)となった。

北朝鮮と米国の軍事衝突リスクが高まる場面では、リスク回避の動きから下押し圧力が掛かるも一時的。その後は、独8月の製造業PMI・速報やIfo景況感指数など相次いで予想を上回るなど欧州経済の好調さが示された事や、欧州中銀(ECB)のドラギ総裁の講演でECBの緩和縮小期待が高まった事などから買いが優勢となると、30日に2016年2月以来の高値となる131.70円台まで反発した。



四本値

OPEN	130.565
HIGH	131.710
LOW	127.566
CLOSE	130.938

8日	トランプ米大統領は、北朝鮮が米国をこれ以上脅かせば「世界がこれまで目にしたことのないような炎と猛威に直面することになる」と述べて、同国の挑発をけん制した。この発言を受けてNYダウ平均が下落するなど、リスク回避の動きが強まった。なお、この発言に先立ち一部米紙は「北朝鮮はミサイルに搭載可能な小型核弾頭を開発した」と報じていた。
9日	北朝鮮の国営放送が「中距離弾道ミサイル4発をグアムに向けて発射する計画を8月中旬までに策定する」と発表した事がきっかけとなり、アメリカと北朝鮮の軍事衝突リスクが高まった。
23日	独8月製造業PMI・速報が59.4と、市場予想(57.6)を上回り前回(58.1)から上昇するとユーロが値を上げた。その後に発表されたユーロ圏8月製造業PMI・速報も57.4と市場予想(56.3)を上回った。
25日	独8月Ifo景況感指数は115.9となり、前回(116.0)から僅かに低下したが、市場予想(115.5)は上回った。その後、ジャクソンホール・シンポジウムで、ドラギECB総裁が講演で「貿易の開放性が脅威に晒されている」「保護主義は生産性の向上や潜在成長にとって深刻なリスク」「拡張的な金融政策を採用している場合、規制当局は危機を招くような要因を回避すべき」などと発言。金融政策に関する具体的な言及はなかったが、足元で進むユーロ高に対するけん制発言もなかったため、市場はユーロ買いで反応した。
29日	早朝に北朝鮮が発射したミサイルが日本の上空を通過して襟裳岬沖に着水した事が伝わると、リスク回避の動きから円買いが活発化。しかし、小安く始まったNYダウ平均が反発した事や、米国防総省が「北朝鮮のミサイルは北米とグアムの安全を脅かさない」との見解を示した事でリスク回避ムードが緩むと、反発した。
31日	ユーロ圏8月消費者物価指数・速報値は前年比+1.5%と、予想(+1.4%)を上回り7月(+1.3%)から加速した事から、ユーロ/円は131.50円台まで上昇。しかし、ECB関係筋の見解として「量的緩和に関する討議は始まったばかりで、9月7日の次回理事会で何らかの決定をする可能性は非常に低い」「ユーロ高がインフレを抑制し、輸出への影響から成長を阻害することを懸念する一部当局者から、資産買い入れペース縮小を急速なものではなく緩慢なペースで行うことを求める圧力が高まっている」などと報じられると反落した。

EUR/JPY

日経平均

OPEN	19907.08
HIGH	20113.73
LOW	19280.02
CLOSE	19646.24

独 D A X

OPEN	12147.89
HIGH	12336.00
LOW	11868.84
CLOSE	12055.84

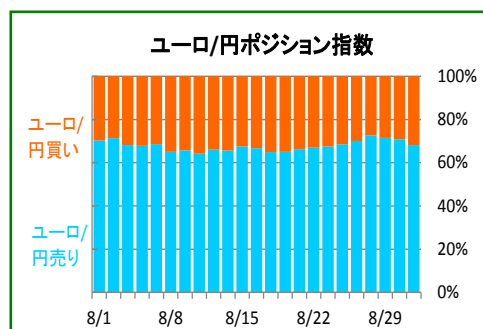
独2年債利回

OPEN	-0.675%
HIGH	-0.662%
LOW	-0.747%
CLOSE	-0.727%

独10年債利回

OPEN	0.548%
HIGH	0.556%
LOW	0.320%
CLOSE	0.361%

8月のポジション動向



9月のユーロ圏の注目イベント

- ・7月ユーロ圏小売売上高(5日)
- ・9月独消費者物価指数・速報値(28日)
- ・ECB理事会(7日)
- ・9月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数(19日)
- ・9月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(29日)
- ・9月独/ユーロ圏製造業PMI・速報(22日)
- ・独連邦議会選挙(24日)
- ・9月独Ifo景況感指数(25日)

9月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

7月のECB理事会で、ドラギ総裁が「金融緩和の縮小の議論を秋に開始する」と発言した事で、市場の関心は7日のECB理事会に集まっている。来年1月からの緩和規模縮小について具体策が示されればユーロ買い材料視される公算が大きい反面、次回以降の会合に決定が持ち越しとなれば失望からユーロが売られる事も考えられる。直後のユーロ相場は荒れた展開となる可能性が高そうだ。

また、北朝鮮情勢にも引き続き注意したい。今月3日に北朝鮮が過去最大級の水爆実験を実施した他、マティス米国防長官が「われわれには数多くの軍事的選択肢がある」と発言すると、4日の東京市場が株安・円高で反応するなど、軍事衝突に対する警戒感が高まっている。市場関係者の間では、一連の動きは北朝鮮の瀬戸際外交との見方が支配的であるが、9日の北朝鮮の建国記念日前後は警戒が必要だ。万一衝突の際はリスク回避の動きが予想されるため、今月も引き続き関連報道に神経質な反応を示すと見る。(川畑)

(予想レンジ:127.400~133.000円)

ユーロ/ドル 8月の推移

EUR/USD

8月のユーロ/ドル相場は1.16621～1.20699ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.6%の小幅上昇(ユーロ高・ドル安)となった。

欧州中銀(ECB)の緩和縮小期待によるユーロ高の流れの中、堅調に推移。欧州中銀(ECB)理事会議事録でユーロ高を嫌気していることが明らかとなり、ユーロが売られるも一時的となり、ジャクソンホール・シンポジウムでドラギECB総裁がユーロ高に懸念を示さなかった事からユーロ買いが活発化。心理的節目の1.20ドルを突破すると2015年1月以来の高値となる1.2070ドル付近まで上伸するも、買い一巡後は31日のECB関係者からのユーロ高けん制発言もあり、やや押し戻された。



四本値

OPEN	1.18423
HIGH	1.20699
LOW	1.16621
CLOSE	1.19075

17日	欧州中銀(ECB)理事会の議事録が公表され、「当局者はユーロが上昇しすぎるリスクを懸念」「インフレ加速の決定的な証拠が不足」などが明らかとなった。また、スペインのバルセロナでテロが発生し、車両が群衆に突っ込み、死傷者多数となった事も重しとなり、ユーロは下落した。
23日	独8月製造業PMI・速報が59.4と、市場予想(57.6)を上回り前回(58.1)から上昇するとユーロが値を上げた。なお、その後に発表されたユーロ圏8月製造業PMI・速報も57.4と市場予想(56.3)を上回った。ただ、その後は欧州株が軟調に推移する中で失速した。
25日	独8月Ifo景況感指数は115.9となり、前回(116.0)から僅かに低下したが、市場予想(115.5)は上回った。ジャクソンホール・シンポジウムで、イエレン米連邦準備制度理事会(FRB)議長が金融政策に言及しなかった事から、ドル売りが優勢となった。また、ドラギECB総裁が講演で「貿易の開放性が脅威に晒されている」「保護主義は生産性の向上や潜在成長にとって深刻なリスク」「拡張的な金融政策を採用している場合、規制当局は危機を招くような要因を回避すべき」などと発言した。こちらも金融政策に関する具体的な言及はなかったが、足元で進むユーロ高に対するけん制発言もなかったため、市場はユーロ買いで反応した。これらを受けてユーロ/ドルが上昇した。
31日	ユーロ圏8月消費者物価指数・速報値は前年比+1.5%と、予想(+1.4%)を上回り7月(+1.3%)から加速した。その後、ECB関係筋の見解として「量的緩和に関する討議は始まったばかりで、9月7日の次回理事会で何らかの決定をする可能性は非常に低い」「ユーロ高がインフレを抑制し、輸出への影響から成長を阻害することを懸念する一部当局者から、資産買い入れペース縮小を急速なものではなく緩慢なペースで行うことを求める圧力が高まっている」などと報じられると反落するも、予想より弱い米経済指標を受けて米長期金利が低下すると切り返した。

EUR/USD

NYダウ平均

OPEN	21961.42
HIGH	22179.11
LOW	21600.34
CLOSE	21948.10

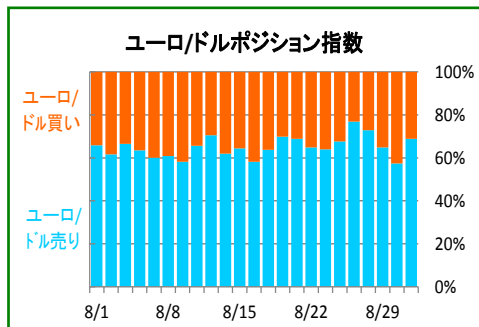
独10年債利回

OPEN	0.548%
HIGH	0.556%
LOW	0.320%
CLOSE	0.361%

米10年債利回

OPEN	2.2996%
HIGH	2.3192%
LOW	2.0841%
CLOSE	2.1170%

8月のポジション動向



9月のユーロ圏の注目イベント

- ・7月ユーロ圏小売売上高(5日)
- ・9月独消費者物価指数・速報値(28日)
- ・ECB理事会(7日)
- ・9月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数(19日)
- ・9月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(29日)
- ・9月独/ユーロ圏製造業PMI・速報(22日)
- ・独連邦議会選挙(24日)
- ・9月独Ifo景況感指数(25日)

9月の見通し

[月間指標カレンダー\(外部リンク\)](#)

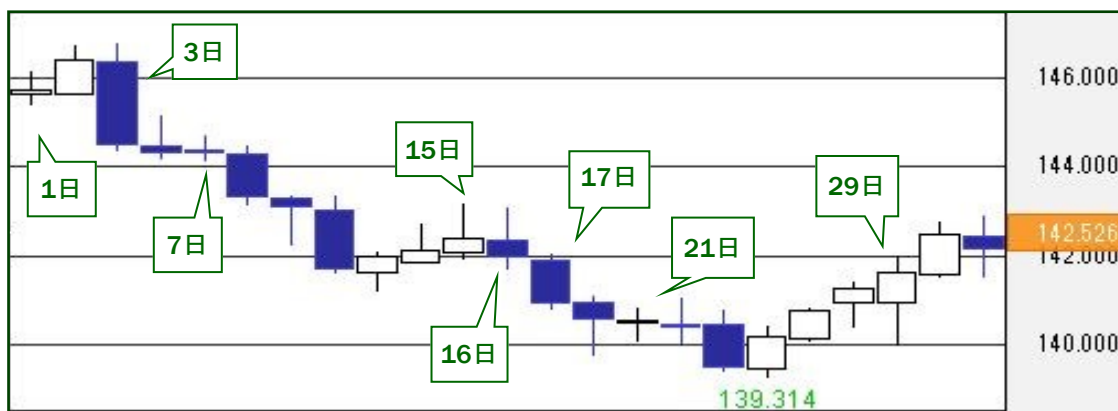
7月のECB理事会で、ドラギ総裁が「金融緩和の縮小の議論を秋に開始する」と発言して以降、市場では緩和縮小期待が高まっている。現在、ECBは今年12月までの期限で、毎月600億ユーロの資産買い入れを実施しているが、7日の理事会で来年1月以降の資産購入規模の減少が明らかとなれば、ユーロ買いが強まる公算である。ただし、先月31日に加え、今月1日にもECB関係者から9月の理事会でまとまらないとの見方が示されており、決定が次回以降の理事会に持ち越しとなる場合にも注意が必要だろう。

また、24日に独連邦議会選挙が予定されている。3日に行われたテレビ討論会後の世論調査では、メルケル首相率いるキリスト教民主・社会同盟(CDU・CSU)がライバルのドイツ社会民主党(SPD)を支持率でリードしている事が明らかとなった。首相4選となるか注目したい。(川畑)

(予想レンジ:1.15000~1.21500ドル)

ポンド/円 8月の推移

8月のポンド/円相場は139.314~146.783円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約2.4%の下落(ポンド安・円高)となった。英中銀(BOE)のメンバーが一部交代した事もあるが、利上げ支持派が増えなかった点や、BOEが経済成長見通しを下方修正した点が、利上げ観測を後退させ、ポンド安に繋がった。また、北朝鮮がミサイル発射実験などを強行した事で米国との緊張度合が増した点は円高に作用。その他、英国の欧州連合(EU)との離脱交渉に関する不透明感が強まった事や、欧州中銀(ECB)による早期の金融政策正常化への期待などからユーロが全面的に上昇した事もポンドの重しとなった。こうした中、24日には6月15日以来の安値となる139.314円まで下落した。



四本値	
OPEN	145.633
HIGH	146.783
LOW	139.314
CLOSE	142.172

1日	英7月製造業PMIが55.1と予想(54.5)を上回り前回(54.3)から上昇するとポンド買いが優勢となった。
3日	BOEは金融政策委員会(MPC)を開催し、6対2の賛成多数で予想通りに政策金利(0.25%)の据え置きを決定。ただ、英国のEU離脱が家計を圧迫するとの見方から、経済成長率見通しを2017年1.7%、18年1.6%と5月時点(1.9%、1.7%)から引き下げた(19年は1.8%に据え置き)。これを受けて利上げ期待が後退するとポンドが急落。なお、インフレは2017年10月に3%付近でピークを迎えるとの見通しを示し、18年2.6%、19年は2.2%と従来の見通しを維持した。
7日	英首相府は「(前日に一部英紙が報じた)EU離脱に伴う精算金として400億ユーロ支払う用意があるとの報道は憶測に過ぎない」と発表した。なお、EU側は600億ユーロの精算金を提案している。
15日	英7月消費者物価指数は前年比+2.6%と、市場予想(+2.7%)に届かなかったが、同小売物価指数は前年比+3.6%、同生産者物価指数も前年比+3.2%と、市場予想(+3.5%、+3.1%)を上回った。
16日	英7月雇用統計は、失業者数が0.42万人減(前月:0.35万人増)となった。4-6月期平均賃金は前年比+2.1%と予想(+1.8%)を上回り、前回分も上方修正(+1.8%→+1.9%)されるなど、比較的強めの内容であった(失業率は前月と変わらず2.3%)。これを受けてポンド買いが優勢となった。
17日	英7月小売売上高は、自動車燃料を含む売上高が前月比+0.3%と予想(+0.2%)を上回ったが、前月分が下方修正(+0.6%→+0.3%)された事もあるためポンド高の反応は限定的であった。
21日	メイ英首相の報道官が「(Brexitについて)10月までに協議を進展させ、次の段階に進む事に自信を持っている」などと発言した事を受けて一時ポンド高に振れる場面があった。
29日	北朝鮮が早朝に発射したミサイルが日本の上空を通過して襟裳岬沖に着水。緊急警報システム「Jアラート」やNHK速報でこの事実が伝わると同時に円買いが活発化した。しかし、米国防総省が「北朝鮮のミサイルは北米とグアムの安全を脅かさない」との見解を示した事でリスク回避ムードが緩むとNY市場終盤に円が売り戻された。

GBP/JPY

日経平均

OPEN	19907.08
HIGH	20113.73
LOW	19280.02
CLOSE	19646.24

FTSE100

OPEN	7372.00
HIGH	7551.85
LOW	7289.20
CLOSE	7430.62

英2年債利回

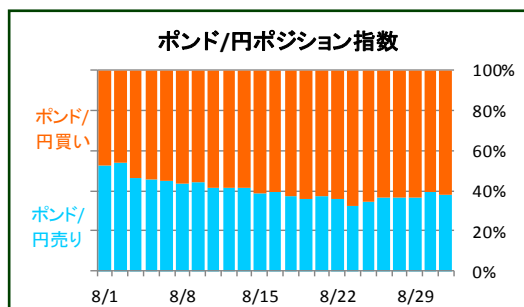
OPEN	0.273%
HIGH	0.308%
LOW	0.142%
CLOSE	0.176%

英10年債利

OPEN	1.240%
HIGH	1.261%
LOW	0.987%
CLOSE	1.034%

8月のポジション動向

9月の英国の注目材料



- ・8月英製造業PMI(1日)
- ・8月英建設業PMI(4日)
- ・8月英サービス業PMI(5日)
- ・7月英貿易収支(8日)
- ・7月英鉱工業生産(8日)
- ・8月英消費者物価指数(12日)
- ・8月英小売物価指数(12日)
- ・8月英生産者物価指数(12日)
- ・8月英雇用統計(13日)
- ・8月英小売売上高(14日)
- ・BOE政策金利発表(14日)
- ・BOE議事録(14日)
- ・4-6月期英経常収支(29日)

9月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

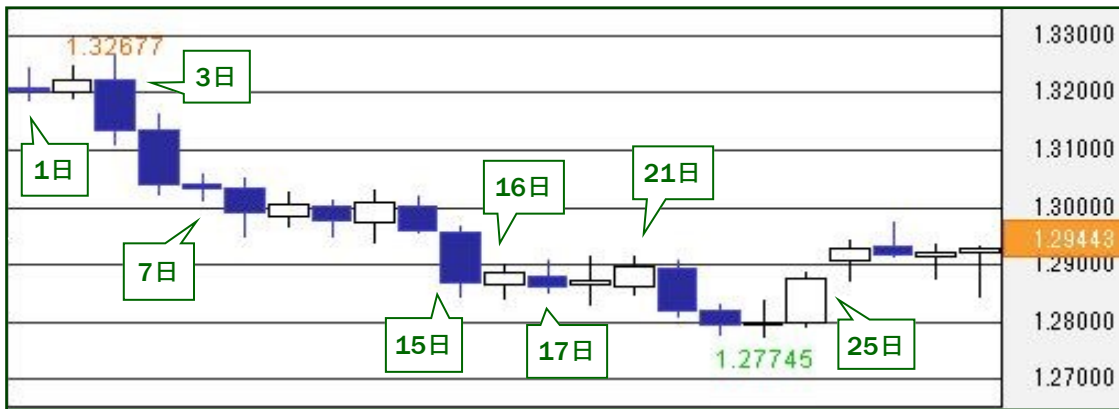
英国と欧州連合(EU)の間で行われる離脱交渉の行方が注目される。8月末に行われた第3回目の会合では、離脱後の関係を巡る協議入りに必要な進展は得られなかった(EUのバルニエ首席交渉官)と報じられている。EUは、英国に住むEU市民の権利保護や、英国とアイルランドの国境問題、英国が離脱に伴い支払う清算金についてまず合意することが必要との姿勢を崩していない。英国としてはこれら離脱条件の協議に早くメドを付けて、10月には離脱後の関係についての協議に移りたい考えだが、離脱精算金の額などを巡り、EUとの溝は深いようだ。離脱期限である2019年3月まで残り1年半の時間があるが、この間に交渉を纏め上げる事ができるか不安が漂い始めている。もし、このまま9月の交渉が難航すれば、英国の目論見どおりに10月に第2段階に進む事はほぼ不可能となる。先行き不透明感が強まり、ポンド安が進行する事になるだろう。なお、9月18日頃から交渉の第4ラウンドが行われる予定となっている。(神田)

(予想レンジ: 137.500-146.000円)

ポンド/ドル 8月の推移

GBP/USD

8月のポンド/ドル相場は、1.27745～1.32677ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約2.2%の下落(ポンド安・ドル高)となった。英中銀(BOE)が、同国の経済成長見通しを引き下げた一方、インフレ見通しは据え置いた事などから、利上げ観測が後退。また欧州連合(EU)との離脱交渉が英国優位には進みそうにないとの懸念も広がった。さらに、欧州中銀(ECB)が年内に大規模緩和の修正(正常化)に動くとの観測からユーロが全面的に上昇した事もポンドの重しとなった。こうした中、24日には1.27745ドルまでポンド安・ドル高が進み、ほぼ2か月ぶりの安値を記録した。



四本値	
OPEN	1.32103
HIGH	1.32677
LOW	1.27745
CLOSE	1.29300

1日	英7月製造業PMIが55.1と予想(54.5)を上回り前回(54.3)から上昇するとポンド買いが優勢となった。
3日	BOEは金融政策委員会(MPC)を開催し、6対2の賛成多数で予想通りに政策金利(0.25%)の据え置きを決定。ただ、英国のEU離脱が家計を圧迫するとの見方から、経済成長率見通しを2017年1.7%、18年1.6%と5月時点(1.9%、1.7%)から引き下げた(19年は1.8%に据え置き)。これを受けて利上げ期待が後退するとポンドが急落。なお、インフレは2017年10月に3%付近でピークを迎えるとの見通しを示し、18年2.6%、19年は2.2%と従来の見通しを維持した。
7日	英首相府は「(前日に一部英紙が報じた)EU離脱に伴う精算金として400億ユーロ支払う用意があるとの報道は憶測に過ぎない」と発表した。なお、EU側は600億ユーロの精算金を提案している。
15日	英7月消費者物価指数は前年比+2.6%と、市場予想(+2.7%)に届かなかったが、同小売物価指数は前年比+3.6%、同生産者物価指数も前年比+3.2%と、市場予想(+3.5%、+3.1%)を上回った。
16日	英7月雇用統計は、失業者数が0.42万人減(前月:0.35万人増)となった。4-6月期平均賃金は前年比+2.1%と予想(+1.8%)を上回り、前回分も上方修正(+1.8%→+1.9%)されるなど、比較的強めの内容であった(失業率は前月と変わらず2.3%)。これを受けてポンド買いが優勢となった。
17日	英7月小売売上高は、自動車燃料を含む売上高が前月比+0.3%と予想(+0.2%)を上回ったが、前月分が下方修正(+0.6%→+0.3%)された事もあってポンド高の反応は限定的であった。
21日	メイ英首相の報道官が「(Brexitについて)10月までに協議を進展させ、次の段階に進む事に自信を持っている」などと発言した事を受けて一時ポンド高に振れる場面があった。
25日	米カンザスシティ連銀主催のジャクソンホール・シンポジウムで、イエレン米連邦準備制度理事会(FRB)議長が講演を行った。金融政策に関する具体的な言及は行わなかったが、市場はバランスシート縮小や利上げに触れなかった事を「ハト派的」と解釈してドル売りに傾いたため、ポンド/ドルが上昇した。

GBP/USD

NYダウ平均

OPEN	21961.42
HIGH	22179.11
LOW	21600.34
CLOSE	21948.10

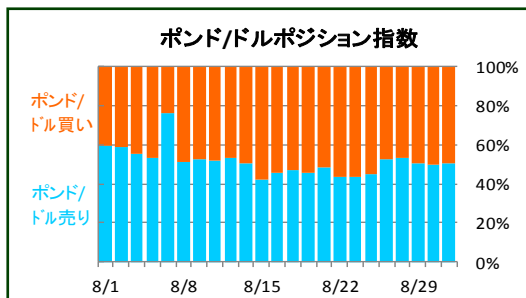
米10年債利回

OPEN	2.2996%
HIGH	2.3192%
LOW	2.0841%
CLOSE	2.1170%

英10年債利回

OPEN	1.240%
HIGH	1.261%
LOW	0.987%
CLOSE	1.034%

8月のポジション動向



9月の英国の注目材料

- ・8月英製造業PMI(1日)
- ・8月英建設業PMI(4日)
- ・8月英サービス業PMI(5日)
- ・7月英貿易収支(8日)
- ・7月英鉱工業生産(8日)
- ・8月英消費者物価指数(12日)
- ・8月英小売物価指数(12日)
- ・8月英生産者物価指数(12日)
- ・8月英雇用統計(13日)
- ・8月英小売売上高(14日)
- ・BOE政策金利発表(14日)
- ・BOE議事録(14日)
- ・4-6月期英経常収支(29日)

9月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

英中銀(BOE)は8月会合で、成長率見通しを引き下げた一方、インフレ見通しは据え置いた。Brexitによる景気減速は避けられないが、ポンド安等によるインフレの上昇は限定的との見方だ。仮に、英経済がBOEの見通しどおりに進めば、将来的に利上げに踏み切る必要性は薄れよう。12日発表の8月英消費者物価指数や、14日のBOE金融政策委員会(MPC)が注目される。また、18日頃に始まる英国と欧州連合(EU)の第4回離脱交渉の行方にも注目が集まりそうだ。なお、8月末に行われた第3回交渉では「ほとんど進展がなかった(EUのバルニエ首席交渉官)」とされる。

一方、米国は8月の物価指標でインフレ鈍化傾向が示されており、19-20日の連邦公開市場委員会(FOMC)における利上げ確率(短期金利市場や金利デリバティブ市場の織り込み度合い)はほぼゼロだ(バランスシートの縮小には着手するとの見方が強い)。現状、30%前後に留まっている12月の利上げ確率がFOMC後にどのように変化するかがドルの方向性のカギとなる。FOMC声明や経済・金利見通し、イエレン米連邦準備制度理事会(FRB)議長の会見が注目される。その他、米議会が来年度予算に絡んで債務上限問題で合意できるかも、ドルの動きに影響を及ぼすだろう。

英米の双方ともに、経済情勢だけでなく政治情勢が注目されると見られ、9月のポンド/ドル相場は不安定化する公算が大きい。(神田)

(予想レンジ: 1.26500-1.32000ドル)